

奈良時代の係助詞「も」に関する考察

森 野 崇

一 はじめに

現代日本語の助詞「も」の研究には既に多くの蓄積があり、種々の分析が行われているが、いずれにせよ、その中心的な用法は、

三浦君も成功した。中田君も成功した。

本田君も山口君も成功した。

相馬君も成功した。

のように、同類のモノ・コトを並べて示したり、他にまだ同類のモノ・コトが存する意を含みつつ、あるモノ・コトをとりたてて示したりする点に求められよう。

古代日本語に目を転じると、こちらもこの〈並列〉〈含蓄〉などと呼ばれる「も」の例は多く、先行研究においても、古代語の「も」の用法の中心に〈並列〉〈含蓄〉を位置づける説は少なくないが、一方、古代語の「も」には現代語のそれには認めがたい用法もあり、〈並列〉〈含蓄〉とは異なる観点から接近を試みる立場も存する^①。

本稿では、奈良時代語の資料となる『古事記』『日本書紀』の歌謡及び『万葉集』を用いて、この時代の「も」の用法を整理し、更に各用法のつながりや連続性といった問題も検討していく。そこには、終助詞の右の行の「も」のところと同

程度にあけて下さい。「も」を扱った森野崇（一九九六）において今後の課題とした、終助詞「も」の機能からの文中の「も」へのアプローチも絡んでくることとなる。

なお、次節以降の文中の「も」・文末の「も」の呼称に関してであるが、文中の「も」は、問題もあるが係助詞「も」とし、単に「も」と記した場合もこちらの「も」をさす。文末の「も」は、右で称したとおり終助詞「も」とする。また、複合化が進んだと解されるものの多い、他の係助詞に下接した「も」は、今回はとりあげない。

二 「も」の現象面の整理

本節では、「も」の現象面の特徴を観察する。この種の調査は、既に工藤美紗子（一九九三）が行っていて参考になるが、「否定と呼応する」といった係り先によるもの、「並列を示す」といった「AもBも」形式をまとめたもの等、分類基準が統一されずにまとめられている面が存する。本稿では、「も」の上接語の調査と「も」の係り先にあたる部分の調査とを分け、別々に報告していくこととしたい。A・B二つの表を使用するが、補読の「も」及び『万葉集』の東歌・防人歌の「も」は、表の数値には含んでいない。

二―一

まず、表Aを用いて「も」の上接語を概観する。

最も多いのは体言で、全体の五七％近くを占める。その内訳を、述部との論理的関係の点から見ると、ガ格に立つ体言に下接した「も」が最多で半数以上に及び、以下ヲ格に立つ体言、時を表す体言の順で続く。ただ、時を表す体言や数詞といった連用修飾成分と解しうるものを除くと、「体言＋も」は全体の約四八％に減少する。「も」と対置されることの多い係助詞「は」の場合、『万葉集』で調査すると、時の体言等を除いても、体言に付いた例が七一％ほど存する。しかも、ガ格に立つ体言に下接した例が、「も」と比較してかなり多い。「は」と「も」の対照研究を行う際、注意すべき現象であ

る。

〈表A〉 「も」の上接語

			古 事 記 歌 謡	日 本 書 紀 歌 謡	万 葉 集	合 計
体 言			23	20 ^{*3}	756	799
準 体 助 詞		く	0	2	45	47
格	に		1	4	123	128
	を		2	0	24	26
	と		1	2	26	29
	助	よ り	0	0	2	2
		よ	1	0	0	1
		ゆ	0	1	14	15
詞		に て	0	0	1	1
	接 続 助 詞	て	0	1	33	34
		つ つ	0	0	25	25
か ら に		0	0	1	1	
副 助 詞	だ に	0	4	28	32	
	す ら	0	0	2	2	
	さ へ	0	0	1	1	
	の み	0	0	9	9	
	ま で	0	0	1	1	
動 詞・用			1	0	33	34
形 容 詞・用			3	2	51	56
形容動詞・用			0	0	2	2
助	り・用		1	0	0	1
	ず・用		0	0	11	11
動	体言なり・用		0	0	17	17
	べ し ・ 用		0	0	5	5
	詞	ごとし・語幹	0	0	2	2
副 詞 ^{*1}		2	0	121	123	
感 動 詞 ^{*2}			0	0	4	4
合 計			35	36	1337	1408

※1 副詞には、「も」が付加した形で一語ともみられる「いたも」「かもかくも」等を含めてある。

※2 感動詞として処理した例は、いずれも「否も諾も」という慣用表現である。

※3 『日本書紀』の体言のうち一例は、『古事記』との重出歌謡のものである。

これと関連して、「も」には、副詞や形容詞連用形、あるいは助動詞連用形に下接した例、つまり連用修飾成分に下接した例がある程度まとまって認められることにも、気をつけておかななくてはならない。これらの活用語連用形や副詞に付いた「も」は、全体の一六%近くに達する。更に、副詞的に用いられる時を表す体言や数詞の例を含めると、その比率は約二四%にまで上昇する。ちなみに「は」の場合、上接語が時を表す体言であるものを含めても、連用修飾成分に付いた例は一%弱にしかない。結局「は」は体言に直接することが多く、その中でもが格に立つ体言に付く例が圧倒的に多

いという、主題提示のはたらきに直結する現象が観察されるのに対し、「も」は、体言に直接する例が最多ではあるものの、連用修飾成分に付く例も「は」に比べて相当数採集され、むしろこの点に特徴のある助詞だと考えられる。

続いて、「も」が付く助詞をチェックする。助詞への下接では、格助詞「に」に付く例が突出しているのであるが、これは「は」にも共通する現象で、「も」の特性とは言えない。接続助詞の「て」の場合も、「は」にもある程度まとまった例が認められるが、ただ、「も」が下接した接続助詞「つつ」が後続句と逆接の関係を構成しやすい点には、注意が必要であろう。

ここで注目しておきたいのは、副助詞の欄である。上接語が副助詞である例は、「も」で三・二%ほど、「は」で〇・四%ほどと、かなりの開きを示す。特に、「も」の方の「だにも」の多さは無視できない。

①彦星は嘆かす妻に言だにも（谷毛）告げにぞ来つる見れば苦しみ（『万葉集』巻一〇 二〇〇六）

②岩の上に小猿米焼く米だにも（多爾母）食けて通らせ山羊の老翁（『日本書紀』皇極）

「だにも」の転じた、平安時代に主として漢文訓読文に使用された副助詞である「だも」の存在も、「だに+も」という承接が珍しくなかったことを物語つていよう。

また、「のみ」に「も」が付いた例が九例ある点にも、留意しておきたい。

③……言のみも（耳毛）名のみも（耳母）我は忘らゆましじ（『万葉集』巻三 四三二）

④近くあれば名のみも（耳毛）聞きて慰めつ今夜ゆ恋のいや増さりなむ（『万葉集』巻二 三三三五）

③は「AもBも」という形にも見えるが、単純な〈並列〉の「も」としては解釈しにくいし、④も〈含蓄〉を表すものとは解されない。「音のみも」「名のみも」「よそののみも」等、既に表現が定型化している面があるけれども、現代語で「秋田さんだけも来た」とか「名前だけでも忘れない」といった文が成立しないことを思えば、「……だけ」という限定を行う助詞に「も」が下接していたことを示すこの現象は、見おとせないものであろう。

〈表B〉「も」の結び

			古 事 記 歌 謡	日 本 書 紀 歌 謡	万 葉 集	合 計			古 事 記 歌 謡	日 本 書 紀 歌 謡	万 葉 集	合 計	
動 詞			4	5	74	83	終	こ そ	0	0	1	1	
形 容 詞			1	4	124	129		なく〈願望〉	0	1	4	5	
形容動詞			0	0	0	0		な も	0	0	3	3	
体 言			0	0	8	8		ね	1	1	1	3	
流 れ			16	9 * 2	546	571		し か	0	0	1	1	
助	客 体 的 表 現 * 1	す	0	1	0	1	助	てし か	0	0	10	10	
		ふ	0	0	1	1		もが(も)	1	3	6	10	
		つ	0	0	9	9		が ね	0	0	5	5	
		ぬ	0	0	19	19		が に	0	0	2	2	
		た り	0	0	4	4		なく〈禁止〉	0	0	3	3	
		り	0	0	4	4		(な一)そ	0	0	8	8	
		き	0	0	8	8		そ〈断定〉	0	0	5	5	
		ず	4	3	39	46		も	0	1	7	8	
		まし じ	0	0	5	5		なく〈詠嘆〉	0	0	1	1	
		体言なり	0	0	2	2		詞	か	1	0	33	34
		ご と し	0	0	1	1			か も	0	3	62	65
動	(主 体 的 表 現)	む	5	2	133	140	を		0	0	12	12	
		ま し	0	0	7	7	も の を		0	0	11	11	
		じ	0	1	16	17	も の		1	0	0	1	
		け む	0	0	4	4	や		0	0	22	22	
		ら む	0	0	20	20	連		や も	0	1	16	17
		ら し	1	0	3	4			ぬか(も)	0	0	31	31
		詞	(主・客)	け り	0	0			26	26	語	な く に	0
べ し	0			0	6	6	合計 (左の各行を含む)		35	36		1337	1408

※1 客体的表現にあずかる助動詞、主体的表現にあずかる助動詞のグループ分けは、主として北原保雄（一九八二）を参考にした。
 ※2 『日本書紀』の「流れ」のうち一例は、『古事記』との重出歌謡のものである。

二二二

次に、係助詞とされる「も」の結びにあたる部分を観察しておく。表Bに示したとおり、結び部分には終助詞がめだつが、この点に関しては、終助詞を単に結び部分に添えられているものとみなし、その直前の語との呼応をまず整理するという方法もあるかと思う。確かに「——ぞ——連体形+かし」などの場合は、「——ぞ——連体形」の係り結びが成立した上で、そこに「かし」が付加していると分析されるが、「も」は結びにいわゆる曲調終止を要求する助詞ではないし、その文末に現れる終助詞も、願望表現を形成する「こそ」「なも」、「——も——か」の形で感動表現を形成するとみられる「か」など、文意に直接関与するものが少なくない。そこで、表Bには終助詞のデータを優先して示し、その直前の語については、必要に応じて報告することとしたい。

さて、「も」の結び部分でまず目につくのは、終止形の結びと呼応しない、「流れ」とした例の多さである。右に述べた終助詞で文が終っているものも、終止形で言いきっているとはいいがたいし、事実その上接語の活用形が連体形や未然形といった終助詞も見られる。加えて、表Bでは各欄に一括して処理したが、活用語の場合、係り先が言いきりになってはいても、終止形終止でなく係り結びによる連体形や已然形、あるいは命令形で終止している例も存する。これらも考慮すると、しばしば言われることだが、やはり「も」を簡単に係助詞と認定するのは無理なようである。係助詞の中に留めるにしても、その位置づけには工夫が必要だと思われる⁽²⁾。

なお、「流れ」のうち条件句中に用いられた「も」については、その条件句が逆接の関係を構成していることが多いという特徴がある。「て」「つつ」といった接続助詞に「も」が下接したときに逆接の意が生じやすいことや、「と+も」から逆接の接続助詞「とも」が生じたことなどに関連する現象であろう。

次に、形容詞による結びの例が一二九例、九%少々見えることにも注意したい。他の係助詞では「こそ」が似た傾向を示すが、ただ「も」の場合はその形容詞の多くが「なし」で、九一例に及ぶ。

⑤山辺の小島子ゆゑに人術らふ馬の八匹は惜しけくも(謀)なし(那斯) (『日本書紀』雄略)

結び部分の助動詞に目を移すと、第一に「む」の一四〇例という数値が目される。全体の一〇%近くを占めているわけだが、同時に、「む」が所属する主体的表現にあずかる助動詞、即ち表現主体の主観の直接的表現にあずかると解される助動詞が結びに使用される割合が、客体的表現にあずかる助動詞の結びに比べて六%程度高い点にも、気をつけたい。主体的表現にあずかる助動詞は、いずれも推量表現の形成に関わる機能をもっており、この傾向は、推量表現や特に「む」による意志の表現と「も」との呼応として、これまでも注目されている。

一方、客体的表現にあずかる助動詞の中で結び部分に見られることが多いのは、「ず」である。「む」と比較すれば少なく、全体の三・二%程度であるが、連語として立項した「なくに」の二・五%もあわせ、「ましじ」や「じ」、更に先の「なし」も一括して、否定表現との共起現象としてとり扱うべきであろう。

次に、結び部分に使用されている終助詞の観察に移るが、ここには「——も——か」「——も——かも」という形式が相当数存する。二つを合わせると七%になり、「も」の呼応現象を考える上で外すことのできないものであるが、川端善明(一九六三b)が詳述しているとおり、その構造は単一ではなく、いくつかのタイプに分けられる。

⑥心なき雨にも(毛)あるか(鹿)人目守りとしき妹に今日だに逢はむを (『万葉集』卷二二 三二二)

⑦山県に蒔ける青菜も吉備人と共にし摘めば楽しくも(母)あるか(迦) (『古事記』仁徳)

⑧秋萩の枝もとををに露霜置き寒くも(毛)時はなりにけるかも(可聞) (『万葉集』卷一〇 二二七〇)

⑨奥山の岩本菅の根深くも(毛)思ほゆるかも(鴨)我が思ひ妻は (『万葉集』卷一一 二七六一)

⑩悔しくも(毛)老いにけるかも(鴨)我が背子が求むる乳母に行かましものを (『万葉集』卷二二 二九二六)

⑪……うれたくも(母)鳴くなる鳥か(加)…… (『古事記』神代)

⑥⑦は、「雨なり」「楽し」といった述語部分に「も」が介入したために、「にもある」「くもある」の形をとっていると考

えられる例で、川端善明（一九六三b）が「述語の分節」という説明を行っているものである。これらは結局、「も」の付いた連用修飾成分によって修飾される成分が、「も」の使用によりいわば分出された「あり」になっているわけであるが、続く⑧⑨の場合は、「なる」「思ほゆ」といった述語に向かう連用修飾成分に、「も」が下接していると解される。⑩は⑥⑦と異なり、「も」の付いた成分と後続部分とが、「老いにけること、悔し」という関係で理解できるもので、川端善明（一九六三b）はこれを、『も』に上接の情意は実質的に述語なのである（三二ページ）と論じている。⑪も、「も」の付いた連用修飾成分の係り先が、「鳥の鳴くことになること」として理解可能な、主述の明示された句的事態であることがやや異なるものの、「連用修飾成分+も」が「鳥の鳴くことになること」に対する述語の関係にあるとみなせる点で、⑩の場合に等しい。

なお、この「か」「かも」の直上の語に目を向けると、最も多いのは動詞で、⑥⑦のような「も」介入例の存在により、特に「あり」の例がめだつ結果となっている。そのほかでは、⑧に見られる助動詞「けり」の例が多い。また、周知のごとく、推量系助動詞に「か」「かも」が下接すると、疑問・反語表現に大きく傾斜するが、これは「——も——か」「——かも——」の場合も同様である。ただ、この形の例はまれで、しかも「動詞+敢ふ」の間に「も」が入った例や主格に立つ体言に「も」が付いた例等、⑥⑦⑪のような例と同一視することのためらわれるものとなっている。

⑫……大舟のゆくらゆくらに思ひつつ我が寝る夜らを数みも（文）敢へむかも（将敢鴨）（『万葉集』卷二三 三二七四）

⑬八百日行く浜の砂も（毛）我が恋にあにまさらじか（不益歟）沖つ島守（『万葉集』卷四 五九六）

さて、結び部分に見られる終助詞としては、このほかに願望表現の形成に関わるものにも注意が必要だろう。表Bの「こそ」から「もが（も）」に至る助詞は、大きく願望表現に関わるものとして括れるだろうし、「がね」「がに」についても、将来への期待や希望の意が込められる例が多く、近いところに位置づけられるかもしれない。加えて、連語として処理した「ぬか（も）」も、詠嘆の意を込めた願望を表すとされるものである。結局全体の五％程度が、願望表現と共起していることになる。結び部分の助詞の側から調査しても、「ぬか（も）」などは「——も——ぬか（も）」というパターンが明確

に認められる。やはり「も」と願望表現との共起は、偶然ではあるまい。

そのほかの終助詞では、「や」及び「や」と「も」の複合した「やも」の例がめだつ。これらは疑問表現や反語表現を形成するので、「も」と疑問・反語表現との共起現象としてまとめることができる。ちなみに「——も——や」では、「や」の上接語が終止形とみられるものが一〇例（動詞八例、「む」一例、「ず」一例）、已然形のもものが一二例（動詞五例、「む」五例、「らむ」一例、「ず」一例）存する。「——も——やも」の方は全て「已然形＋やも」で、内訳は動詞三例、「む」一例、「らむ」二例である。「や」「やも」の直上には推量系助動詞が位置する例が多いわけで、「——も——か」「——も——かも」では⑫⑬のような例しか見られないのと対照的である。

以上、「も」の結びにあたる部分の観察を行ってきた。「も」には終止形終止と呼応した例がけっして多くなく、簡単に係助詞として処理することが躊躇される結果となった。特定の活用形との呼応ということよりも、むしろ工藤美紗子（一九六三）や大野晋（一九九三）が指摘するとおり、特定の表現、即ち推量や意志、否定、願望、疑問、反語などと共起しやすいことを、その大きな特徴として記述すべきであろう。前述の「流れ」に関しても、「も」の付いた成分の関係先に注目すると、

⑭恋ひつつも（母）今日はあらめ（目）ど玉くしげ明けなむ明日をいかに暮らさむ（『万葉集』卷二二 二八四四）

⑮雨間明けて国見も（毛）せむ（将為）を故郷の花橘は散りにけるかも（『万葉集』卷一〇 一九七二）

⑯倭文たまき数にも（母）あらぬ（不在）身にはあれど千年にもがと思ほゆるかも（『万葉集』卷五 九〇三）

⑰天離る鄙とも著くここだくも繁き恋かも和ぐる日も（毛）なく（奈久）（『万葉集』卷一九 四〇一九）

など、やはり推量や意志、否定の表現になっていることが珍しくない。「流れ」の場合も含めて考えれば、「も」とこれらの表現との共起現象は、より強固なものとなろう。

三 「も」の諸用法とその連続性

本節では、第二節で観察した「も」のふるまいの特徴を念頭に置きながら、奈良時代の「も」の諸用法の考察を行い、あわせて用法間の連続性についても検討していく。

三―一

現代日本語の「も」の基本的用法として〈並列〉や〈含蓄〉があげられることは第一節でふれたが、現代語の「も」を対象とした研究では、それ以外の用法の解析も進んでいる。例えば沼田善子（一九八六）では、まず本稿の〈並列〉〈含蓄〉に該当する用法を「単純他者肯定」と名づけ、これを「も₁」として、

古米の過剰分がだぶつき、新米も₁なお増産がつづく。

幼児も₁学童も₁参加させましょう。（二五七ページ）

といった例をあげた後、「も₂」として、

彼女はたいていのことは話すのだが、実は、親友にも₂話せない秘密がある。（二五七ページ）

という例を示す。沼田善子（一九八六）は右の「親友」について、「それ自体が極端な程度にあるものとして、強調されているように受けとれる」（二五七ページ）と述べ、この「も」が「さえ」と置換できる点にも言及した上で、これを「意外」の「も₂」と呼ぶ。更に、

春も₂たけなわの今日この頃です。（二六〇ページ）

のような「も」の場合は、「も」の使用により含意される他者が想定しにくく、むしろ他者は存在しないと考えられることから、前の二つの「も」とは別に処理し、「柔らげ」の「も₃」と結論づけている⁽³⁾。

この三つの用法は、本稿が扱う奈良時代語の資料においても確認できる。

⑱千葉の葛野を見れば百千足る家庭も(母) 見ゆ国の秀も(母) 見ゆ (『古事記』応神)

⑲神木にも(毛) 手は触るといふをうつたへに人妻といへば触れぬものかも (『万葉集』巻四 五二七)

⑳白鳥の鷺坂山の松陰に宿りて行かな夜も(毛) ふけ行くを (『万葉集』巻九 一六八七)

⑮が「単純他者肯定」、⑯が「意外」、⑰が「柔らげ」の例となろう。

一方、前節で行った現象面の整理からもうかがえるとおり、現代語の「も」に見出しにくい用法が、古代語の「も」には存する。先に確認した現象面の特徴が、はたして現代語の「も」に共通するのかといった疑問もある。大野晋(一九九三)は、時代が下るにつれて「も」が否定や推測、願望等の表現に使用される割合が減少していくことを、『万葉集』『源氏物語』『平家物語』等、各時代の文献のデータをあげて論証している。むしろ、現象面の特徴も変化してきたと見られるのである。古代語の「も」の用法が、現代語のそれと重なるものばかりならば、その解析には、現代語の「も」について得られてきた知見がそのまま適用されてもよいが、相違が存在する以上、やはりその相違点、即ち特に古代語の「も」に集中して認められる用法の考察が、欠かせないであろう。

三一二

古代語の「も」独自の用法で、使用頻度の高いものに、「――も――か」「――も――かも」という構文があった。

㉑見れど飽かずいましし君がもみち葉の移りい行けば悲しくも(喪) あるか(香) (『万葉集』巻三 四五九)

㉒悔しくも(毛) 満ちぬる潮か(鹿) 住吉の岸の浦回ゆ行かましものを (『万葉集』巻七 一一四四)

㉓との曇り雨降る川のさざれ波間なくも(毛) 君は思ほゆるかも(鴨) (『万葉集』巻二二 三〇二二)

㉔昔より言ひけることの韓国の辛くも(毛) ここに別れるかも(可聞) (『万葉集』巻一五 三六九五)

㉕㉔のような「も」は、〈並列〉〈含蓄〉とは考えられないし、沼田善子(一九八六)の言う〈意外〉や〈柔らげ〉の類とも異なると思われる。

これらの「も」とのつながりが最も緊密なのは、奈良時代に集中して見られる終助詞の「も」ではないだろうか。第一節でふれた森野崇（一九九六）では、いわゆる感動の表現を、情意を引き起こす事態と遭遇したことによる、急激な感情の高まりである〈驚嘆〉と、急激な高まりとは言えない情意の表出である〈詠嘆〉とに二分した上で、終助詞「も」について、〈詠嘆〉の表出にのみあずかる助詞と捉え、それが明示する情意とは、表現時に成立・展開する事態が機縁となって生起し、内心を満たしていてもはや抑制することが困難になった結果表出される、嘆息のごときものと分析したのであるが、その情意の表出が、文末の「か」「かも」と呼応する形で文中においてなされるとき、それを明示する役割を、やはり「も」が担ったのだと思われる。終助詞「も」には形容詞に付いた例が多いが、これも、「か」「かも」と呼応した係助詞「も」に、形容詞連用形を含めた連用修飾成分に下接する例がめだつことと、結びつく現象であろう。殊に、右の②④や先に引いた、

⑩悔しくも（毛）老いにけるかも（鴨）我が背子が求むる乳母に行かましものを（『万葉集』巻二二 二九二六）

⑪……うれたくも（母）鳴くなる鳥か（加）……（『古事記』神代）

といった例は、「も」が付加している連用修飾成分が、後続部分で述べられていることが機縁となって生起する情意を表しており、川端善明（一九六三b）が説いていたとおり、「連用修飾成分＋も」の部分が実質的には述語だという見方も可能である。従って、これらの「も」と、

②⑤天なるや月日のごとく我が思へる君が日に異に老ゆらく惜しも（文）（『万葉集』巻二三 三三四六）

②⑥うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しも（毛）一人し思へば（『万葉集』巻一九 四二九二）

といった終助詞「も」とは、きわめて近い関係にあると言えよう。更には、終助詞「か」が係助詞「も」と呼応すること、同じ「か」が終助詞「も」と接続して一助詞化した「かも」と同様に、より感動表現の形成に関わってくる点も、係助詞「も」と終助詞「も」とが連続していることを、示唆しているものと考えられる。

なお、「——も——か」「——も——かも」の「も」の場合、終助詞「も」がほとんど下接しない「けり」が「か」「かも」の直前に見られる例が珍しくないなどの点から、終助詞「も」よりも広く情意表出に参与した可能性もあるが、そうだとすればおそらく、終助詞グループには他にも感動表現の形成に関わる助詞が複数存するのに対し、係助詞「も」の方には他にその種の助詞がほとんどない^⑥といったことが、影響しているであろう。

以上、「——も——か」「——も——かも」構文の「も」について検討を加えてきた。^⑦文末の「も」から「——も——か」「——も——かも」へと考察を進めた論としては、川端善明（一九六三a）及び川端善明（一九六三b）があるが、やはりこの視点は、係助詞「も」の用法の展開を考える上で、欠くことのできないものである。

三—三

さて、係助詞「も」が本来、終助詞「も」同様、内心を満たしていてもはや抑えきれないところにまで高まった情意の表出を示す助詞だったとすると、最も容易にその機能からの連続性が指摘できるのは、次のような例であろう。

②⑦ 大和辺に君が立つ日の近づけば野に立つ鹿も（毛）とよめてそ鳴く（『万葉集』巻四 五七〇）

②⑧ ほととぎす来鳴く五月の短夜も（毛）一人し寝れば明かしかねつも（『万葉集』巻二〇 一九八二）

②⑨ ちはやぶる神の斎垣も（毛）越えぬべし今は我が名の惜しけくもなし（『万葉集』巻一一 二六六三）

③⑩ 隠りづの沢たつみなる岩根ゆも（毛）通して思ふ君に逢はまきは（『万葉集』巻一一 二七九四）

これらは、沼田善子（一九八六）の言う〈意外〉の「も」にあたる例である。いずれも極端な程度にある対象のとりたてに「も」が用いられており、「……までも」「……さえも」といった現代語訳があたる。例えば、②⑦は「惜別の情などとても抱きそうもない鹿までも」ということだし、③⑩は「頑丈でとても貫きとおせそうもない大きな岩さえも」の意と解される。他の例も〈意外〉の「も」であることは明白だが、このような、予想以上に、あるいは予想もつかないほどに極端な程度にあるモノ・コトの認識が、表現主体の情意の高まりを引き起こしやすいことは、十分予測されるのではないだ

ろうか。奈良時代には〈意外〉の「も」の例がめだつが、この用法は、〈詠嘆〉からの展開として、その最も近くに位置づけられるものと思われる。

また、〈意外〉のうち、最低・最小限度の対象を「も」がとりたてる用法に連なるものとして、以下のような例があげられる。

③①この世には人言繁し来む世にも（毛）逢はむ我が背子今ならずとも（『万葉集』巻四 五四二）

③②我が恋を夫は知れるを行く舟の過ぎて来べしや言も（毛）告げなむ（『万葉集』巻一〇 一九九八）

③③家に行きて何を語らむあしひきの山ほととぎす一声も（毛）鳴け（『万葉集』巻一九 四二〇三）

これらは、最低限度を「も」が示していると言っても、予想を越えて極端に低いという例ではない。表現主体にとって許容できる最低限度を「も」がとりたてているものである。③①は、「当然現世で逢うことを望んでいるけれども、それがかなわぬ状況ゆえ、せめて来世にでも」という意だろうし、七夕を詠んだ③②は、「舟を寄せて逢ってくれることがかなわないのなら、せめて言葉だけでも」と訴えている例である。③③にしても、「一声」は明らかに最低限の希望である。現代語ではおおよそ「でも」が担うこの用法は、〈譲歩〉〈許容〉などのことばでまとめられると思うが、最低ラインという極端な程度の一つの極のモノ・コトのとりたてを行う点で、②⑦③③とつながっているとみてよいだろう。「せめて……でも」よりも「たとえ……でも」といった訳出があたる、

③④浅茅原小野に標結ふ空言も（毛）逢はむと聞こせ恋のなぐさに（『万葉集』巻二二 三〇六三）
のような例も、〈譲歩〉〈許容〉として同様に扱える。

ところで、現代語で「後も」を使用した場合、「今も……」の含みが感じられ、その「も」は〈含蓄〉の用法と解されるが、奈良時代においては、そうは思えない例が少なくない。

③⑤一瀬には千度障らひ行く水の後にも（後毛）逢はむ今にあらずとも（『万葉集』巻四 六九九）

③⑥ 妹が見て後^も（後毛） 鳴かなむほととぎす花橘を地に散らしつ （『万葉集』巻八 一五〇九）

③⑦ 我が背子は待てど来まさず……今更に君来まさめや さなかづら後^も（後毛） 逢はむと慰むる心を持ちて…… （『万

葉集』巻一三 三三八〇）

③⑤は「後にも」の例になるが、「今にあらずとも」とあって、「今も」を含意する「後にも」でないことが明らかであるし、③⑥も、下句の内容から判断してむしろ今は鳴いてはしくないわけで、「今も」の意を含む「後も」とは解せない。③⑦の場合も、今は「我が背子」が訪れてこないのだから、当然「今も」の含みのある「後も」ではない。^⑧

この種の「後も」については、大野晋（一九九三）がとりあげており、

これらの例（森野注Ⅱ右の③⑥と同一例及び「ありさりて後^も（能知毛）逢はむと思へこそ露の命も継ぎつつ渡れ」△『万葉集』巻一七 三九三三）の二例）では「後も」となれば「将来にでも、もしできたら」と「将来」を仮定する意を表わす。

「将来」は、不確実、不確定、未定のものと扱われ、文末の推量・希望も不確かさを伴う。（五四ページ）

と述べている。注目すべき見解であるが、これらの例も、極端な場合のうちの最低・最小限度のモノ・コトをとりたてる「も」と捉えてよいのではあるまいか。再び③⑤③⑦を検討する。③⑤の場合、「今」でなく大野晋（一九九三）の説く不確かな「将来」に恋人と逢うことは、歌の作者にとって望ましい事態とはいえないのであるが、現在は逢うことがかなわないために、やむをえず「せめて後（Ⅱ将来）でもよいから逢おう」という意で、「後にも」と詠んだのであろう。③⑦も、同様にして作者の切実な希望が表現されている例である。③⑥は、ホトトギスが橘の花を散らしてしまうことを詠んだ長歌の反歌二首のうちの一詩であり、長歌で「醜ほととぎす」などと言われている点からも、この一連の歌ではホトトギスが歓迎されざる者として描かれていることが明白である。従って、やはり作者は「ホトトギスよ、おまえが鳴くことについては、まあよしとしよう」と譲歩した上で、「鳴くにしてもせめて妹が花橘を見た後で」の意で「後も」と詠んだのだと考えられる。

「後も」同様、現代日本語の同じ構成の語との間に意味的な相違が認められ、その違いに奈良時代の「も」の語性が絡んでいるものに、「またも」がある。現代語では、「またも」は重ねて同様の事柄が起こる意を表す語だが、奈良時代にはそのような把握では不十分な例が存するのである。

③⑧またも（復毛）逢はむよしもあらぬか白たへの我が衣手に斎ひ留めむ（『万葉集』巻四 七〇八）

③⑨玉の緒の絶えたる恋の乱れなば死なまくのみそまたも（又毛）逢はずして（『万葉集』巻一一 二七八九）

これも結局、極端なところにあるモノ・コトをとりたてる「も」を用いることで、「また（＝再度）」を譲歩できる最低限度として示したものと分析される。即ち、③⑧は「せめてもう一度だけでも逢う方法、その方法だけでもないものか」と解釈できるし、③⑨も、「せめてもう一度逢いたい」という望みが否定された形で、「再び逢うことさえもかなわずに」の意を汲みとることが可能である。

このように、奈良時代においては、極端なところにある対象をとりたてる点で〈意外〉に連なる〈譲歩〉の「も」もめだつのであるが、譲歩した結果である最低・最小限度も満たされない状況で、その最低・最小限度のモノ・コトに「も」を使用した場合は、③⑨や、

④⑩……名のみを名見山と負ひて千重の一重も（裳）慰めなく（七國）（『万葉集』巻六 九六三）

④⑪住吉の粉浜のしじみ開けも（藻）見ず（不見）隠りてのみや恋ひ渡りなむ（『万葉集』巻六 九九七）

など、多く否定表現と共起して、「譲歩した結果の最低限である……さえ……ない」といった、やはり〈意外〉と結びつく表現になる。このあたりの用法の展開は副助詞「だに」に似ており、それについては後述するが、ともかく④⑩や④⑪の「も」、②⑦～③⑨から連続しているものと認められよう。

三一四

前項で考察してきた、極端な程度にあるモノ・コトのとりたてによる〈意外〉とか〈譲歩〉とかの用法は、古代日本語

の「も」に見出される、ある程度定型化の進んだ表現ともつながっている。ここでは、そのような例を二つほど紹介しておきたい。

一つは、「——も——に」というパターンの表現である。

④② 笹の葉はみ山も(毛) さやに(尔) さやげども我は妹思ふ別れ来ぬれば (『万葉集』巻二 一三三)

④③ 家人は道も(毛) しみに(荷) 通へども我が待つ妹が使来ぬかも (『万葉集』巻二 二五二九)

④④ さ夜ふけて妹を思ひ出でしきたへの枕も(毛) そよに(二) 嘆きつるかも (『万葉集』巻二 二八八五)

これらの「も」、現代語の「も」の中心的用法である〈含蓄〉の例などともみなすべきではないだろう。④②は「山全体がざわざわとするほどに」、④③は「道が一杯になるほどに」、④④は「枕が動いて音をたてるほどに」とそれぞれ解釈されるが、このように「——も——に」の形で叙述されているのは、作者の気持ちはともかく、客観的に見ればいずれも誇張表現といってよいほどのもので、当然極端な程度にある事態であり、それゆえ特に「も」が多くそこに使用され、定型表現化していったのだと考えられる。

もう一つの例は、願望表現を構成する「——も——ぬか(も)」である。この構文には、「雨でも降らないかなあ」といった軽い願望の表出と捉えられる例もあるが、一方で切実な願望を訴えていると解される例も珍しくない。

④⑤ 二上の山に隠れるほととぎす今も(母) 鳴かぬか(奴香) 君に聞かせむ (『万葉集』巻一八 四〇六七)

④⑥ この見ゆる雲ほびこりてとの曇り雨も(毛) 降らぬか(奴可) 心足らひに (『万葉集』巻一八 四二二三)

④⑤は「今も」とあるが、文脈から判断して、それまでもホトトギスが鳴いていたことを含意する「も」ではない。これは、「君」に鳴き声を聞かせたいのに向にホトトギスが鳴きださない状況での、「お願いだから、せめて今の今(だけでも)」という切実な願いの表出であり、そのために、〈譲歩〉の用法をもつ「も」が、「今」をとりたてるのに使用されると把握すべきではあるまいか。④⑥は、小規模ではあるが日照りが続き、田畑の状態が次第に悪化してきたときに詠まれ

た、雨乞いの長歌の反歌である。従って、「雨でも降らないかなあ」という軽い例示の気持ちではなく、他のことは望まずにともかく降雨を待ち望む、切実な「せめて雨が降ってくれさえすれば」という思いが表出されているわけであり、それが「も」の使用につながっていると解される。おそらく、「ぬか（も）」の願望表現と「も」とは、このように最低・最小限度のモノ・コトのとりたてからの「も」の〈譲歩〉の用法によって、より切実な願望の意の表出が可能になるために、結びついてきたのではないだろうか。もちろん、『万葉集』に見られる「――も――ぬか（も）」の例全部が、④⑤④⑥のごとく切実な願望であることが明確なものではないし、この時代に既に〈含蓄〉の「も」も存在するから、軽い例示の例があってもよいのだが、これまで検討してきた「も」の用法の展開を重視すれば、右のプロセスでこのパターンが生じた可能性も否定できないと思われる。

このほかにも、最低・最小限度方向の対象のとりたてである「つれもなし」や「よしもなし」「すべもなし」、最高・最大限度方向の対象のとりたてである、一語化の進んだ副詞「いたも」等、「も」が定着した背景に、極端な程度にあるモノ・コトをとりたてる用法が想定される例は少なくない。奈良時代に、以上のような定型化の進んだ表現が存在することも、「も」の用法が、かつては現代語の場合ほど〈並列〉〈含蓄〉に偏っていなかったことの、傍証となるであろう。

三一五

本節では、係助詞「も」の用法に関して、終助詞「も」の〈詠嘆〉表出明示の機能を始発点に、文中における情意表出の用法から〈意外〉の用法へ、更にその極端な程度にあるモノ・コトのとりたてが最低・最小限度のモノ・コトに向かったときに生じる〈譲歩〉の用法へという順序で、その連続性を考えてきた。「後も」や「またも」の使用に現代語のそれと異なる点があることなどからも、〈並列〉〈含蓄〉の用法よりも早くに確立したとみられる、極端な程度にあるモノ・コトをとりたてる用法の、後代に比べてのこの期の使用範囲の広さといったものは、理解できよう。

なお、現代日本語の場合も含めて、疑問詞に「も」が付加したときには、疑問でなく、同種の全てを包括してとりたて

る、いわゆる全称を表すが、これも、肯定表現と共起する際は最高・最大の極としての「全て」、否定表現と共起する際は最低・最小の極としての「全て」と考えることができるようであり、極端な程度にあるモノ・コトのとりたての用法から接近して見るべき現象だと思われる。

四 「も」の用法と現象面の特徴

前節で述べたとおり、奈良時代の「も」には、〈詠嘆〉の表出を明示する機能から展開したとみられる、極端な程度にあるモノ・コトをとりたてての例が多く、それらは〈意外〉や〈譲歩〉の「も」としてはたらいっているのであるが、本節では、第二節において観察した「も」のふるまいから、そのような奈良時代の「も」の状況を反映する特徴を探ってみたい。

第二節で整理した現象面の特徴のうち、連用修飾成分に下接した例の多さや、「——も——か」「——も——かも」形式の多さに関しては、〈詠嘆〉明示の機能と密接に関わるものとして、既に述べた。〈詠嘆〉に連なる、〈意外〉〈譲歩〉といった用法の「も」に関与する現象としては、「ず」「じ」「ましじ」「なし」「なくに」といった、否定表現と共起する例の多さや、「む」に代表される推量系助動詞との共起の多さ、更には願望表現や疑問・反語の表現との共起などが、あげられよう。このうち、推量系助動詞による推量あるいは意志の表現との共起や、否定表現との共起は、「流れ」としてまとめた終止形終止と呼応しない「も」の例にも、多く認められる現象であった。

「も」が、右の種々の表現と共起しやすい点については、工藤美紗子（一九六三）や大野晋（一九九三）が「も」と不確定表現との呼応現象と分析し、「も」が不確定や不安定の意を示す助詞であることの証左として重視している。参考になる見解であるが、ただ、これらの表現を不確定とか不安定といった捉え方で一括りにするのは、少々大きなまとめ方にすぎないように思われる。これまで行ってきた用例の解析から言えば、推量系助動詞中の「む」による意志表現との呼応や、「もが（も）」「ぬか（も）」等による願望表現との呼応については、〈意外〉と連続する、最低・最小限度方向での極端な程

度のモノ・コトのとりたてによる〈譲歩〉の用法が関わっていると考えられるし、否定表現や疑問・反語表現との呼応は、そのような最低・最小限度のモノ・コトすら否定されたり、あるいはその成立さえ疑わしかったりする状況が、やはり〈意外〉の用法と結びつきやすいためと解されよう。

既に明らかかと思うが、このような「も」の用法と現象面の特徴との関係は、第三節第三項でわずかばかり言及した「だに」の場合とよく似ている。即ち、「だに」もまた否定や推量、意志、願望、反語等の表現との呼応が指摘される助詞であり、それが最小限度望ましい状態であることを示したり、その最小限度の事態が否定されて「……さえ……ない」の意を表したりといった用法を中心にもつ。「も」の方が、特にある種の表現と共起する必然性の希薄な〈並列〉〈含蓄〉といった用法も有するため、「だに」に比べて各表現との呼応はゆるやかであるが、それでも第二節で観察した程度に共起現象が認められる事実は、その用法に「だに」に通じる一面があることの証しになるであろう。その「だに」に通う部分こそ、右に述べた形ではたらく〈意外〉や〈譲歩〉の用法だと考えられるのであるが、大野晋（一九九三）が指摘するごとく、推量や否定などの表現との呼応例が時代を経て減少していくとすれば、それは、奈良時代にはある程度広く行われていた極端な程度にあるモノ・コトのとりたてが後退していき、現代語の「も」の中心に位置する〈並列〉〈含蓄〉の用法が次第に増加していくことを、示唆する現象だと思われる。

念のため言いさえれば、「だに」と似てはいても、この用法の「も」が「だに」と全く同じ機能をもっているわけではない。「だに」と「も」が接続した「だにも」という形が存在し、漢文訓読文に偏るものの、一語化した「だも」も見られる点は、この二つの助詞が同一環境で用いられやすかったことを示すが、同時に、この二つの助詞の機能が同一でないことも意味している。相互承接が常に「だにも」になる点などから判断して、その大きな違いは、やはり「も」の方が表現主体の主観の直接的な表現、即ち主体的表現としてはたらく点に求められるであろう。そのことは、終助詞「も」による表現主体の〈詠嘆〉の情意の直接的表出を出発点として、係助詞「も」の用法が展開されていたとする推測とも、矛盾す

ることなくつながる。

そのほか、第二節で指摘したふるまいでは、「のみ」に直接した例の存在や、逆接表現との結びつきの強さが、やはり「も」の用法に関係しているものと思われる。現代語ならばまず考えにくい「のみも」という承接が可能だったのは、この「も」が〈含蓄〉ではなく、「のみ」によって限定の加えられた対象を「……だけでも」の意で譲歩的にとりたてているからだと分析できるし、条件句中に「も」が用いられる際に、それが逆接の条件表現である例が多いことや、「つつも」「ても」が後続句と逆接の関係を作りやすいことは、逆接が、前件と後件との結びつきが予測しがたい、むしろ予測に反するものであるときに成立する点で、極端なところにあるモノ・コトをとりたてる用法とつながりやすかったからだと説明できよう。吉田茂晃（一九九〇）は、極端な事態のとりたてによる「も」の上接項目と後続部分との「そぐわなさ」が逆接の関係の構成に関与していることを、三段階に分けて詳述しているが、妥当な分析だと言える。

五 おわりに

奈良時代における係助詞「も」の用法について、考察を行ってきた。古代語の「も」の諸用法の連続性に関しては、〈並列〉〈含蓄〉を中心に据え、その機能から、終助詞「も」までを射程に入れて各用法を説明する論が少なくなかった。しかしながら、これまで述べてきたごとく、終助詞「も」ときわめて近い、「——も——か」「——も——かも」に代表される〈詠嘆〉表出を明示する係助詞「も」を始発点とし、そのような情意の直接的表出を示す助詞の関与が想定される、感情の高まりを引き起こしやすい極端な程度にあるモノ・コトの認識の表現と結びついて確立した〈意外〉の用法、更にその極端な程度が最低・最小限度方向に向かう場合の〈譲歩〉の用法、といった順序で、各用法を連続的に捉える方がよいのではないだろうか。⁹⁾奈良時代語の資料に、「だに」に通じるふるまいが明確に認められたり、「のみも」「後も」「またも」等単純に〈含蓄〉の用法と解せない例が多かったりするもの、当時極端な程度の対象をとりたてる「も」が、現在よりも

盛んだったことを暗示する。おそらく、この用法において極端なところにあるモノ・コトの背後の序列が意識され、限度に位置していない他のモノ・コトに焦点が合わせられるようになったとき、〈含蓄〉〈並列〉といった、現代日本語の「も」の中心にある用法が成立したのだと思われる。

ただし、たびたび指摘したが、これらの用法はいずれも奈良時代に既に存在している。この時代は、係助詞「も」の用法の中で、〈含蓄〉や〈並列〉の占める割合が大きくなる途上だったのではないか。後代の「も」のふるまいにも言及した大野晋（一九九三）に従えば、この推測は大きくは外れていないと思うが、〈含蓄〉の後に成立したとみられる〈柔らげ〉の用法の分析、今回扱いきれなかった現象の考察などとともに、今後の課題としたい。

注

- (1) 古代語の「も」の先行研究については、森野崇（一九九五）で概観した。
- (2) 「は」の場合も、「流れ」の多さからは同様のことが言える。
- (3) 沼田善子（一九九五）では、この「も」を「不定他者肯定」と名づけている。
- (4) ちなみに、岩波書店の日本古典文学大系『萬葉集』や新潮社の新潮日本古典集成『萬葉集』など、ここを「神木にさえ」と現代語訳している注釈書類は少なくない。
- (5) ただし、森野崇（一九九五）でも述べたごとく、この構文の「も」の全てが〈並列〉〈含蓄〉に解されないとは断言できないし、平安時代の「——も——かな」構文になるが、明らかに〈並列〉とみられる例も存する。
さまざまにをかしくもあはれにもあるかな。〔源氏物語〕総角
- (6) 間投助詞の「を」などが考えられるが、そもそも文中で〈詠嘆〉〈驚嘆〉を表現することに困難な面があるのかもしれない。
- (7) 澤田治美（一九九三）は、ここでとりあげた「——も——か」「——も——かも」の「も」と、現代日本語の「幸いにも」「親切にも」「賢明にも」「惜しくも」等の文副詞類との関連について言及し、「この助詞は、『話し手の主観的な命題態度』をマークする機能を持つ、と言えるように思われる」（二三五ページ）と述べている。
- (8) もちろん、
標結ひて我が定めてし住吉の浜の小松は後も（後毛）我が松（『萬葉集』卷三 三九四）
など、「今も」を含蓄するとみるべき「後も」の例も存する。

(9) 先行研究では、井上博嗣(一九七二)にこの見方に通じるかと思われる記述が存するが、奈良時代の「も」を扱った論考ではないため、詳しくは述べられていない。

〔参考文献〕(本文、注でふれたものに限る)

- 川端善明(一九六三a)「助詞『も』の説——文末の構成——」(『万葉』四七号)
(一九六三b)「助詞『も』の説——二、心もしのに鳴く千鳥かも——」(『万葉』四八号)
工藤美紗子(一九六三)「『も』という助詞の意味」(『文学』三一巻一一号)
井上博嗣(一九七二)「助詞『も』の意味とその係助詞性——源氏物語を資料として——(前・後)」(『女子大文学』六〇号・六一号)
北原保雄(一九八一)『日本語助動詞の研究』(大修館書店)
沼田善子(一九八六)「とりたて詞」(『いわゆる日本語助動詞の研究』凡人社)
(一九九五)「現代日本語の『も』——とりたて詞とその周辺——」(『『も』の言語学』ひつじ書房)
吉田茂晃(一九九〇)「万葉集における助詞『も』の文中用法」(『島大国文』一九号)
大野 晋(一九九三)『係り結びの研究』(岩波書店)
澤田治美(一九九三)『視点と主観性——日英語助動詞の分析——』(ひつじ書房)
森野 崇(一九九五)「古代日本語の『も』に関する先行研究の整理」(『『も』の言語学』ひつじ書房)
(一九九六)「古代日本語の終助詞『も』の機能」(『二松学舎大学論集』四〇集)

〔使用テキスト〕

- 『万葉集』Ⅱ『万葉集^{本文篇}』(塙書房)、『古事記』『日本書紀』Ⅱ日本古典文学大系
『古代歌謡集』(岩波書店)。

引用に際しては、宛て漢字、仮名遣いなど、私意によったところがある。